

2026 年 8 月 23 日高知教会礼拝説教

聖書：創世記42章6～17節

説教：ヨセフと兄弟の再会

松浦子基牧師

○もしも、裏切った相手が目の前でひれ伏したら

本日毎年夏に行っている CS 一般合同礼拝で、子どもたちと共に聖書の御言葉に聞くことが出来る恵みに感謝いたします。さて、みなさん、もし、自分の人生をめちゃくちゃにし、どん底に突き落とした相手が、何十年か経って目の前に現れ、自分に向かって地面に頭をこすりつけて命乞いをしてきたら、みんなならどうするでしょうか。

「あの時の苦しみを思い知らせてやる」と復讐するでしょうか。それとも「ざまあみろ」と冷笑するでしょうか。人間なら誰しも、傷つけられた相手に対して黒い感情が湧き上がるのを止められないはずです。

本日の聖書箇所の創世記 42 章には、まさにこの場面に直面した一人の青年ヨセフが登場します。エジプトという大国の最高権力者となったヨセフと、かつて自分をエジプトへ売り飛ばした兄たちとの再会です。

この劇的なドラマの核心に迫るために、まずは時計の針を 20 年以上前に巻き戻し、ヨセフがどのような少年時代を過ごし、困難な中をどのように守られてきたかを振り返ってみたいと思います

○少年ヨセフの「夢」と、残酷な裏切り

物語の始まりは、カナンという場所です。父ヤコブには 12 人の息子がいましたが、ヨセフはヤコブが最も愛した妻ラケルとの間に生まれた子どもだったため、父親からあからさまな偏愛を受けて育ちました。兄たちが普通の服を着て泥まみれで羊を追う中、ヨセフだけは特別に仕立てられた美しい長服(袖付きの長服)を与えられていたのです。当然、10 人の兄たちはヨセフを激しく妬み、憎んでいました。

そんな火に油を注いだのが、ヨセフが 17 歳の時に見た「二つの夢」でした。

ある朝、無邪気で空気の読めないところがあつた 17 歳のヨセフは、兄たちに向かってこう語りました。

「聞いてください！ 私たちは畑で麦の束を縛っていたのですが、私の束がずっと立ち上がると、兄さんたちの束が周りに集まってきて、私の束に向かってお辞儀をしたんです！」

兄たちは顔を真っ赤にして怒りました。「何だと？ お前が俺たちを支配して王にでもなると
いうのか！」

さらにヨセフは、別の夢を見ます。

「また夢を見ました。太陽と月と、11 の星が私に向かってひれ伏したのです。」

この夢は、兄たちだけでなく父親さえも「私やお前の母親、兄たちがお前の前にひれ伏すというのか」とたしなめるほどのものでした。しかし、聖書は「父ヤコブはこのヨセフの言葉を心に留めていた」と記しています。それはヨセフ自身勝手な妄想や野心からくるものではなくて、まことの神様がヨセフの未来に与えた明確な約束だったからです。

しかし、この夢が引き金となり、憎悪は決定的な事件へと発展します。

ある日、遠くで羊の番をしていた兄たちの様子を見に行くよう、父から命じられたヨセフ。遠くから美しい晴れ着を着て歩いてくる弟を見た兄たちは、冷酷な相談を始めました。「おい、見ろよ。あの『夢見るやつ』がやって来るぞ。あいつを捕まえて穴に投げ込んで、野獣に食われたことにしよう。あの夢がどうなるか見てやろうじゃないか。」

兄たちはヨセフを取り囲み、引き裂くようにしてあの自慢の長服を剥ぎ取りました。そして、水のない深く暗い枯れ井戸(穴)の底へと放り投げたのです。

真っ暗な穴の底で、17 歳のヨセフは泣き叫び、兄たちに必死で命乞いをしました。「兄さん、お願いだ、出してくれ！ 僕が悪かった！」

しかし、穴の上からは冷たい笑い声と、兄たちが平然とパンを食べる音だけが聞こえてきました。

長男ルベンや四男ユダの提案により、かろうじて直接命を奪うことだけは免れたものの、やがて通りかかったエジプトに向かう旅の商人たちに、兄たちはヨセフを銀貨 20 枚で売り飛ばしてしまいました。兄たちにとってヨセフは、目障りな邪魔者であり、小遣い稼ぎの道具に過ぎなかったのです。血に染めたヨセフの服を父ヤコブに見せ、「息子さんは獣に食い殺されました」と嘘をついた兄たち。父の悲痛な叫びを背に、ヨセフは見知らぬ異国の地エジプトへと、奴隸として連れ去られていきました。

○異国での絶望、濡れ衣、そして大逆転

エジプトに売られたヨセフの青春時代は、まさに「理不尽」の連続でした。

最初は、ファラオの役人ポティファルの家で奴隷として仕えました。親も友達もない孤独の中で、ヨセフは腐ることなく誠実に働き、主人の信頼を勝ち取って家政のすべてを任されるまでになります。聖書は「主がヨセフと共におられたので、彼は幸運な人となった」と記しています。

しかし、試練は終わりません。ポティファルの妻からの誘惑を「神に対して罪を犯すことはできない」と断固として拒絶した結果、逆恨みされ、身に覚えのない事件の濡れ衣を着せられて牢獄へと放り込まれてしまったのです。

正しく生きて、神に従おうとした結果が「牢獄行き」でした。どれほど神を恨み、運命を呪いたくなったことでしょう。しかし、ヨセフは暗い地下牢の中でも絶望に飲み込まれませんでした。牢の管理者から信頼され、囚人たちの世話をするリーダーとなっていくます。

牢獄の中で、ヨセフはエジプトの王に仕えていた高官たちの不思議な夢を神の力によって解き明かしました。その時、復職が決まった給仕役の長に対して「あなたが助かったら、私のことを思い出してここから出してください」と懇願します。しかし、釈放された給仕長は、自由の身になった途端にヨセフのことを完全に忘れ去り、さらに2年もの歳月が牢獄の中で空しく過ぎ去りました。

17歳で売られてから13年間。奴隷としての屈辱、無実の罪、裏切りと忘却。ヨセフの青年期は、まさに暗闇の底にありました。

しかし、神の時は突然やって来ます。エジプトの最高権力者ファラオが、誰も解き明かせない不気味な夢を見ました。そこで給仕長がようやくヨセフのことを思い出し、ヨセフは牢獄からファラオの前に引き出されます。

ヨセフはファラオの夢を「これからエジプトに7年間の大豊作が訪れ、その後に世界を滅ぼすほどの7年間の大飢饉がやって来る」という神からの警告だと解き明かし、その対策まで完璧に提案しました。

その並外れた知恵と神の霊に満ちた姿に圧倒されたファラオは、ヨセフを即座にエジプト全土を統べる「大臣」に任命したのです。この時、ヨセフは30歳でした。

○創世記42章——運命の再会と「夢」のフラッシュバック

大臣となったヨセフの指揮のもと、エジプトは豊作の7年間に膨大な食糧を備蓄しました。そして予告通り、すさまじい飢饉が全土を襲います。周辺諸国にも食べ物がなくなり、世界中から人々がエジプトに食糧を買いにやって来しました。

そして、運命の創世記 42 章へと舞台は移ります。

カナンの地にいたヤコブの家族もまた、飢えに苦しんでいました。父ヤコブの命令で、10 人の兄たちはエジプトへと穀物を買いに出かけます。

エジプトの宮殿。きらびやかな衣装をまとい、威厳に満ちたエジプトの宰相の前に、みすぼらしい旅の服を着た 10 人の男たちが進み出ました。彼らは、目の前の人物が誰であるかも知らず、ただ食糧を売ってもらいたい一心で、地面にひれ伏し、額を床につけて深くお辞儀をしました。

その瞬間、聖書の創世記 42 章 9 節は、極めて印象的な一節を記録しています。「ヨセフは、彼らについて昔見た夢を思い起こした。」

20 年以上の時を超えて、あの 17 歳の時に見た光景が、寸分変わらず目の前に再現されたのです。「麦の束がお辞儀をする」「太陽と月と星がひれ伏す」。

この時、ヨセフの胸にはどのような感情が走ったのでしょうか。「ざまあみろ、あの夢の通りになったぞ！ 俺を見下して穴に落としたお前たちが、今や俺の足元で命乞いをしている！」と勝ち誇ることもできました。いまやヨセフは一言命じるだけで、兄たち全員の首をはねることも、かつて自分が味わったように奴隷として一生重労働を課すこともできる絶対的な権力を持っていたのです。

しかし、ヨセフが思い起こした「夢」は、単なる自分の出世や優越感を満たすためのものではありませんでした。

ヨセフは気づいたのです。あの 17 歳の夢は、神様が自分を偉くして兄たちを見下すための予言ではなく、「この大飢饉の時代に、大勢の命を救い、そして何よりも自分の一族を守り抜くために、神様が前もって自分をエジプトへと送り込んでいたのだ」という、巨大な神の計画そのものだったということに。

過去のすべての苦しみ、孤独、奴隷の労働、牢獄の暗闇——あの理不尽に思えた無駄な日々のすべてが、一本の線でつながった瞬間でした。

○試された心と、仮面の下涙

しかし、ヨセフはすぐに「兄さんたち、僕だよ！」と抱きつくことはしませんでした。甘い感傷で過去を有耶無耶にするのではなく、彼はあえて厳しい仮面をかぶり、通訳を介して外国語で冷酷に問い詰めました。

「お前たちはスパイだ！ この国の隙を探りに来たんだろう！」

兄たちは青ざめ、必死に弁明します。「とんでもありません！ 私たちは皆ひとりの人の子で、正直な者です。故郷には年老いた父と、末の弟が残っています。そして……もうひとりの弟はいなくなっていました。」

ヨセフは彼らの言葉をあえて信じないふりをして、彼らを 3 日間牢獄に閉じ込めました。そして「お前たちの言葉が本当なら、一人は牢に残り、残りは穀物を持って帰れ。そして末の弟（ベニヤミン）をここに連れてきて証明しろ」と告げます。

追い詰められた兄たちは、ヨセフがエジプト語しか分らないと思い込み、目の前で互いにヘブライ語で後悔の言葉を口にしました。

「ああ、俺たちは弟に対してひどい罪を犯した。あいつが泣き叫んで命乞いをした時、俺たちはその痛みを見ながら耳を貸さなかった。だから今、この苦難が俺たちに降りかかっているんだ。」

長男のルベンも言いました。「だから言っただろう、『あの子に罪を犯すな』と！ お前たちは聞かなかった。今、あの子の血の報いを受けることになったんだ！」

その言葉を聞いた瞬間、ヨセフの感情は決壊しました。

兄たちは、決して過去の悪事を忘れて平気で生きていたわけではなかった。彼らもまた、この 20 年間ずっと、弟を売り飛ばしたという激しい罪悪感と後悔という「見えない牢獄」の中で苦しみ続けていたのです。

ヨセフは彼らの前から急いで立ち去り、別室へと駆け込みました。そして、一人で声をあげて激しく泣きました。

20 年間溜め込んできた孤独、悲しみ、怒り、そして兄たちの後悔を知った安堵と愛。すべての感情が涙となって溢れ出しました。

ヨセフは顔を洗い、再び冷徹な指導者の仮面をつけて部屋に戻り、兄たちの袋に穀物を満たし、彼らが支払った銀をこっそり袋の中に戻して送り出しました。

ヨセフは、復讐によって兄たちを罰するのではなく、兄たちが本当に悔い改め、家族の愛を取り戻すためのプロセスを静かに、そして力強く歩み始めたのです。

○許しとは「復讐の連鎖を断ち切る」こと

ここまで見てきましたヨセフの兄弟との再会物語は、「美しい兄弟の再会物語」では全くありませんでした。むしろ人間のドロドロとした嫉妬、裏切り、トラウマ、そしてそれにどう向き合うかという、極めて生々しい場面です。

私たちも生きてると、理不尽に傷つけられたり、誰かの心無い言葉や裏切りに深く苦しんだりすることがあります。「あいつさえいなければ」「なぜ自分だけがこんな目に遭わなければならないのか」と、怒りと憎しみに心が支配されそうになる夜もあるかもしれません。

しかし、ヨセフの生き方は兄弟をゆるすという決断でした。

「相手をゆるす」とは、傷つかなかったふりをするだけでも、相手の悪事を「大したことじゃない」と正当化することでもありません。

相手をゆるすこととは、復讐の連鎖を、自分の意思で、まさに自分の手で断ち切るという、勇気ある行動です。

ヨセフは、兄たちを許すことによって、自分自身を過去の被害者という立場から解放しました。そして、受けた傷と苦しみのすべてを、「大勢の命を救うための力」へと変えていきました。神様がヨセフに与えた「夢」は、他人を支配して見下すための夢ではなく、傷ついた人々を包み込み、関係を回復させるための約束でした。

今、もしみんなの心の中に、消えない傷や、どうしても許せない誰かがいるなら、ヨセフが流した「仮面の下涙」を思い出してください。痛みを抱えたままでもいい。葛藤しながらでもいい。憎しみを乗り越えて前を向こうとするその一步を、神様は必ず善きことへと導き、みんなの未来を切り拓く力に変えてくださいます。

私たちは、自分の体験する痛みや悲しみの全てを、神様の支配の中で、すべて神様に委ねてその痛みを受け止め直すことができるのです。そして神様が、私たちのその痛みや悲しきをも、最終的には、救いのご計画の中で用いて下さることを信じる事ができるのです。祈りましょう